

学習塾における雑談

渡辺稔(わたなべ総合教育研究所)

1. 学習塾研究の現状並びに本研究の目的

現在我が国には、おびただしい数の学習塾があり、小中学生だけで約 360 万人の子どもたちが通っている^①。長い間その学習塾は、学校教育の不足、受験競争への不安を逆手に取った必要悪として糾弾され、正統な学校教育という領域を侵犯する規格外の教育であるとの印象を強めてきた。それでも近年は、学習塾が公立学校の課外授業等に関与し連携するなど^②、一部ではあるが必ずしも学校対学習塾という対立軸だけで捉えられない状況も呈している。開業や運営方法に規制のない、民間ならではの制度的不完全性^③と裏腹に、その民間であるがゆえに持ちうる、自由な発想のもとに組み立てられている学習塾の諸活動の持つ本質性に学ぶべき点は少なくない。にもかかわらず、管見による限り体系的な学習塾研究はすこぶる少ない^④。

本研究では以上のような問題関心を踏まえ、学習塾における教授過程とりわけ雑談に着目し、雑談の有無や頻度とともにその有用性、それらから垣間見える講師と塾生の相互作用の有り様について検討する。その上で学習塾においても、学校同様学習指導だけではない多様な講師・塾生間のインタラクションが存在することを明らかにする。

2. 先行研究と学習塾における雑談

家本(1999)によれば、「雑談は「ひまつぶしだ」として軽視する教師がいる。「ひまつぶし」も、けっして否定的にとらえてはならない。そこでつかわれるものはいくらでもある。(中略)子どもとの雑談能力は教師の基礎学力である」という。教師にとって子どもとの雑談は、彼女らとの関わりにおいて積極的意味を持つものと考えられている。また田崎(1981)は、勢力資源(resource of power)という概念をもとに、雑談を含む教師の教育活動が学級の雰囲気や学習適応にも影響を与え、その結果、児童・生徒の学校適応感の決定要因となっていることを指摘している。他方、児童・生徒側の持つ学

校享受感に関する因子分析をした小林・仲田(1997)によると、「先生は、興味のあるおもしろそうな話をしてくれるから」や「先生の言うことに「なるほど」と思うから」といった理由で、教師と子どもとの相互作用が明朗性や信頼性・同一化といった因子に促進的に働くという。同じく生徒側の持つ被影響感について速水(1998)によれば、学校の教師の雑談は生徒にとって「先生への好感度、信頼度、コミュニケーション度との正の有意な関係がみられ」る場合がある一方で、自慢話や放談といった負の側面も観察されるという。雑談に限定しているわけではないが、長沼・庄司(2004)は、生徒が教師から受ける被影響感を、①「自己意識・自己実現への影響」、②「不信感形成への影響」、③「学習面への影響」、④「将来展望への影響」、⑤「教師への視点の変化」、⑥「教師の理想モデル化への影響」の6類型に分類、提示している。

学校でみられるこのような教師と生徒間の相互作用、就中雑談は、果たして学習塾の授業の場で観察されるのであろうか。

(社)全国学習塾協会^⑤の設立 20 周年記念大会で、「子どもたちが語る私たちの塾」と題して発表した中3年生のNさんによると、「(入塾前は)塾など勉強ばかりで少しも楽しくない苦痛の場でしかないと思っていました。しかし、この塾と出会い、私の考え方は 180° 変わりました。(中略)言うことは厳しいしなかなかほめてくれない先生ですが、その厳しい言葉の中にも私たちへの期待や愛情がこめられているのが感じられます。」(カッコ内筆者注)という。もうひとりの塾生 S さんは、「この塾に入っている点か(中略)その授業に関連した社会での状況や身近なことを話してくれることです。」と述べている。学習塾には、学校同様教科学習に止まらない講師・塾生間の相互作用があるものと推測される。

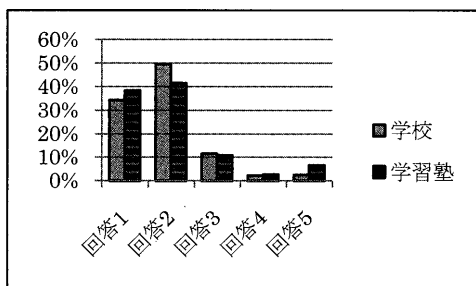
3. 調査の結果と考察

上述した目的と先行研究を踏まえて筆者は、

北海道から福岡県に所在する大小 15 塾の塾生を対象とした質問紙調査(n=1292)と、そのうちの 4 塾においてフィールドワークを実施した。

質問紙調査の結果、学校と学習塾での雑談が「よくある」(回答 1)、「ときどきある」(回答 2)と回答した塾生は合計でそれぞれ 84%, 79%であった(図 1 参照)。一般に、学習塾の授業時間数や滞在時間が学校のそれに比較して少ないことを考えると、学習塾での雑談が学校とほぼ同程度の頻度として塾生達に認識されていることは注目される。

図 1 雑談の頻度



他方、学習塾における雑談の有用性については、「学習面への影響」を意図したと思われるものを中心としながらも多様な雑談がされていること、そして塾生らによるそれらに対する評価は、学校を超える高いものであることが判明した。ただしその高い評価とは、一般に学習塾が期待される学習面に関するものが多いためと考えられる。すなわち、学習塾は評価の対象として可視化されやすい、いわば即時性の高い学習面に関する雑談を、意図的に、場合によっては迎合的にしている可能性がある。この点で、学習塾の雑談が学校の雑談よりも優れていると即断することには注意が必要である。

〈注〉

- (1) 総務省「事業所統計調査報告」2006 年版によると、学習塾は全国に 51,625 塾ある。また、文部科学省「学校基本調査」2009 年度版と同省「子どもの学校外での学習活動に関する実態調査報告」2008 年版によると、小学生 7,063,606 人のうち 25.9%, 中学生 3,600,323 人のうち 53.5%の児童・生徒が通塾している。
- (2) 全国私塾情報センター編『学習塾白書 2008

—2009』による。

- (3) 学習塾の開業・運営に際しては、許認可、届出等はない。関連法規も、特定商取引法や消費者契約法などの一部に契約(入退塾)に関する規定があるのみである。
- (4) 「体系的」研究とは、学習塾の歴史、教育方法、病理的側面などについて、学校研究と同程度の質・量でされていることを想定している。例えば、稲村・小川(1982)、深谷(1985)、国立教育研究所(当時)(1987)、結城・佐藤・橋迫(1987)、新井(1990)など、20 年以上前の「体系的」研究を参照できるが、近年はほとんど見あたらない。
- (5) 昭和 63 年に通商産業省(当時)によって認可された公益法人。本部は東京都豊島区。

〈主要参考文献〉

- 新井郁男, 1990, 『学校と塾や地域との間』ぎょうせい。
- 速水俊彦, 1998, 「先生の雑談が生徒にもたらすもの」『日本教育心理学会総会発表論文集』(40), p.234。
- 深谷昌志編, 1985, 『現代のエスプリ 学習塾』NO.212, 至文堂。
- 家本芳郎, 1999, 「子どもたちと雑談しよう」『月刊生徒指導』11月号, 学事出版, pp.44-45。
- 稲村博・小川捷之編, 1982, 『塾』共立出版。
- 小林正幸・仲田洋子, 1997, 「学校享受感に及ぼす教師の指導の影響力に関する研究」『カウンセリング研究』Vol.30 No.3, 日本カウンセリング学会, pp.11-19。
- 国立教育研究所, 1987, 『学習塾に関する総合的調査研究』。
- 長沼亜紀・庄司一子, 2004, 「生徒における教師からの被影響感に関する研究」『日本教育心理学会総会発表論文集』(46), p.353。
- (社)全国学習塾協会, 2008, 「協会ニュース」第 14 号第 203 号。
- 田崎敏昭, 1981, 「教師のリーダーシップ行動類型と勢力資源の源泉」『実験社会心理学研究』20, pp.137-145。
- 結城忠・佐藤全・橋迫和幸, 1987, 『学習塾 子ども・親・教師はどう見ているか』ぎょうせい。
- 全国私塾情報センター編, 2008, 『学習塾白書 2008-2009』。

※質問紙調査、フィールドワークの調査方法、及び得られた他のデータと詳細な分析については、当日配布する資料を参照されたい。